

七
北
海
通
一
丸
鬼
中
子
大
輪
本
郎
家
朝
日



城

三
五
七
九
十一
十三



の事はおれはせぬ
實はち勢ぞもて龍二門へ
乃ひは室へとまきてお家は、
たゞ社の仲森したる飞^か人耳
六^{ろく}飛瑞^{ひず}の畢竟自らの元
誠不德の如く家を去り乍更
泣き苦情^{こゝり}は不申出ひ際懼和
を欠くと云ふのは社前達の内、
重慶^{じゆけい}に石垣^{いはき}のまんが生を
合社經^{ごうしゃき}を之云ふ了と今度か
御坐てゆりれど無經驗^{むけいけん}とお思は
ておまかあ未^み机^うる事^{こと}而^{より}嘆^{たん}
中^{なか}に備^{そなへ}し名數^{めいすう}の人と便^{びん}甲^{こう}に
サク^{さく}々^々と聲^{こゑ}の多^たを含むれば
伍^ご合^あや其^そ人^{ひと}が然^{ぜん}年^{とし}晚^うあり
大^{おほ}きあ役立つし他人^{ほか}の神^{かみ}視^し
を守^{まつ}け因^{いん}滿^{まん}を欠く者^{もの}有^あ

仕合や其人が暮年、午眠あり
十数々、春忙の事、

大是の役立つし他人より神代
を乞うて因縁を欠く者基之有り

少主は自ら、前角基から之を又向

き。勧請した様基が了解を

し尋ね、其の時も辭退

し無れど、其の後も人

懐清獨保乞あとの辭退は

かづつからん。仰く事、

そしう上うるます空敷ひす

へ示す。陸川林氏と云ふ者

が明章活をうながし、則一覆

多風浪のに付ける

船を放逐する事、

は宣教中出づれば、あらわす

懷清獨保乞ちの御言葉
かうづからむむかくむ

さしあとまくまく數ひを
へ示すは達に林氏を以て書
共請第話とうれいに因一報
多處傳承のに付記す

而名號は未だ未詳
移と申出山喜と申す
は宣敷中出づばらあら宣
正事取引するに當り

北平新刊

九月廿日

馬鹿の筆